

町家合宿 in 京都 vol.6

～名刺交換～

山下桂永子

11年前、参加者は中学生と高校生のみだった町家合宿も、リピーターの多い最近では、参加者は中学生から20代中盤までと幅広くなってきている。そして11年間毎回、宿泊する町家に到着して、参加者にまず取りかかってもらうことが、名刺作りと名刺交換である。

新しい人と人が出会う場で、自己紹介は欠かせない。しかし、不登校やひきこもり経験のある町家合宿参加者の中には、人とコミュニケーションを取ることに不安があったり、苦手意識があることが多いので、自己紹介と言っても、初対面の人に自分の名前を名乗ることすら難しいということがある。なんとかその出会いの緊張を緩和し、スムーズにお互いを知ることができないものかと考えたのが、名刺を作って交換するというものである。



名刺作りの風景①



名刺作りの風景②

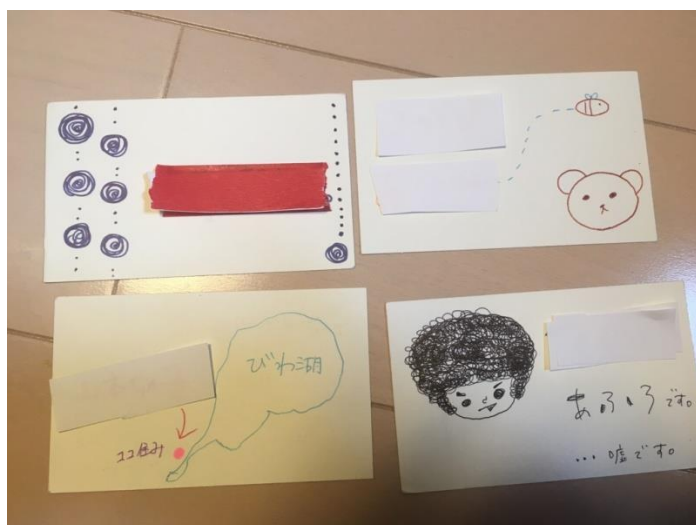
☆名刺交換をしようと思った理由

なぜ中高生の参加者同士で（今は社会人もいるが）名刺交換なのか。そもそも対人援助職になる前の私は、大学卒業後すぐに事務職に就いていて、マナー研修というものを受け（させられ）たことがあった。その中で、来客へのお茶の出し方、お辞儀の仕方、電話応対、タクシーに乗る順番、尊敬語、謙譲語の使い分け、などとともに、名刺交換のロールプレイも行ったのだが、そこで感じたことは「マナーって、合理的で効率的なコミュニケーションの方法でもあるんだなあ」ということだった。マナーとは、（相手との暗黙の合意のもと）商談が円滑に進むよう、邪魔にならぬよう、しかし、相手を丁寧に扱う姿勢は見せるよう、とことん合理的で効率のよいやり方なのかもしれないとその時に初めて気づいたのである。それまでは、マナーもお作法も面倒なだけであったが、その意図や目的がわかると「なんて便利なんだろう、これを身につければ、もう初対面でどうしていいかわからないなんてことがなくなるし、相手に（もよるが）余計な気を遣わなくていいんだ」と目からうろこだったと記憶している。ちなみに対人援助職になった今でも、昔取った杵柄で、電話応対や飛び込みの電話相談は嫌いではない。

そんな私自身の経験もあり、人見知りが多い参加者たちとともに、「将来役に立つし、やっておいて損はない。しかも言葉が（ほとんど）いらぬ自己紹介だよな」ということで、町家合宿で名刺交換をやってみたわけである。

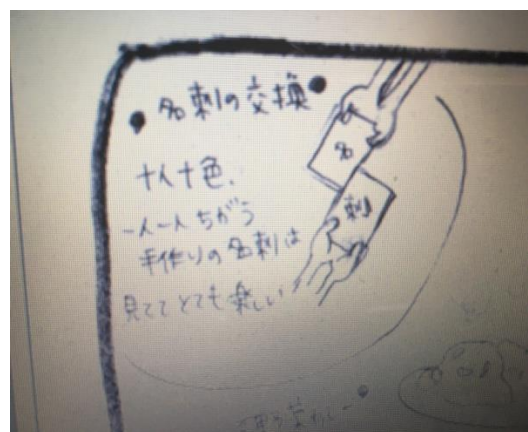
☆名刺交換の様子

用意するのは、名刺用の印刷用紙（ミシン目が入っていて、A4で名刺10枚分ほど）と色鉛筆や多色のペン。「名前でも、ニックネームでもいいし、趣味や血液型、絵でも字でもなんでもいいので、10枚分描いてね」と伝えて名刺作成スタート。その間、私は、自分はいくらかじめPCで作成してある名刺があるので、夕食の用意を始めたり、宿泊代の支払いをしたりしているなか、他のスタッフは参加者と一緒に名刺を作成してもらっている。



交換した名刺の一部。もらってうれしい。

私に関わるフリースクールや適応指導教室の不登校を経験した子たちは、言葉でのコミュニケーションが苦手でも、結構な高確率で絵を描くのが好きだったり、少なくとも学生時代に美術の成績は散々だった私よりも格段にセンスが良く、絵がうまい子が多い。町家に到着して、初対面の人の中で過ごすにあたり、何か決められた作業をやっている方が、黙っていても違和感がないし、集中して緊張がほぐれるという面もあると思う。そうして黙々と作業がすすむが、10人分の名刺を手作りしてもらうので、参加者によっては、かなり時間がかかる。そこはまじめというかこだわりがあるのか、1時間ほどかけて作ってくれる参加者もいる。



名刺交換の様子と名刺交換についての感想文抜粋

作ったあとは実際に交換するのであるが、当初は私が、マナー研修の講師のように、参加者にレクチャーしていたのだが、最近は、スタッフで豊富な社会人経験を持つ方をお願いして、漫談のようなレクチャーをしてもらっている。名刺交換の歴史的背景や、名刺交換後の名刺の扱いに至るまで、丁寧かつおもしろく話をしてくださるので、毎年参加者だけでなく、スタッフも興味津々で話をうかがっている。

その名刺を交換することで自分を知ってもらって相手のことも知る。相手の名前を聞き逃しても、忘れても、こっそり見ればすぐわかるし、町家が終わって家に帰ってからも、あの子の名前なんだっけとなったときに思い返せる。名刺は、社会でも通用する便利なコミュニケーションツールである。11年やってきた名刺交換は、社会人の参加者が増えてきた今だからこそ、日常生活で役に立つこともあるだろうし、続けてきてよかったと思っている。

☆町家合宿の名刺交換を他の臨床現場でやってみた

町家合宿で細々と行っていた名刺交換を他でもやってみた話をしたい。と言っても、私の仕事は対人援助であって、その名刺交換を町家合宿以外でこどもとやってみたというだけなので、相手に実際に役に立ったかどうかはわからない。

☆2011年6月の名刺交換

2011年3月、私は5年ほど続けていた町家合宿のことを、初めて秋の学会で発表することになっていて、論文集に載せる要旨をまとめる作業を行っていた。そんな中、東日本大震災が起きて、3月末に、教育委員会からの震災ボランティアとしての派遣が決まった。月末締切の要旨をなんとか完成させ、夜中に中央郵便局に走り、次の日には宮城県に旅立った。1週間ほどの寝袋生活の中で、避難所の子どもたちと関わり、無力感をとことん感じて帰ってきた。

その3ヶ月後の6月、再び東北に行くことになった。3月の時のように避難所ではなく、避難先の仮校舎で過ごす子どもたちと関わるようになっていた。県立の工業高校が、原発事故によって5つのサテライトに分かれていて、そのサテライトを教員が行ったり来たりするのだが、1つのサテライトから他のサテライトに行くには車で片道2時間はかかるので、授業を行うこともままならない状況だった。そこでのカウンセラーへのニーズは、子どもたちの心のケアはもちろんではあったが、それ以上に「なんでもいい、授業をしてほしい」ということだった。

その高校を卒業すれば、地元の原発関連施設に就職するはずだった生徒たち。そこで起きた原発事故。高校3年生は慣れない土地で突然の求職活動を始めなければならないのに、やり方を教える先生たちもどうしてよいかわからない。そんな家も就職先も将来のロールモデルも失った生徒たちに、対人援助職者として一体何ができるだろう。3か月前のように無力感だけ抱えて帰るのも正直いやだけど、分断と喪失の悲しみに寄りそうにはどうしたらいいのかもわからなかった。カウンセラーだからメンタルヘルス？リラクゼーション？私がやっても付け焼刃のような気がした。そんな中で生徒一人ずつ、15分ほど話を聴くことを続けるうちに、ふと名刺交換を試みようと思った。「将来どこに行っても役に立つ。やっておいて損はないし、しかも言葉が（ほとんど）いらぬ自己紹介だよ」と。

カウンセラーが名刺交換のレクチャーをして何になるねん、と思わないでもなかったが、その数日前、私はその時のカウンセラー派遣事業の前の陣で行っておられた尊敬する先生から、今でも強烈に私を奮い立たせる言葉を頂いていた。「そこに臨床心理学的知見があれば、何をやっても心理臨床である」という言葉である。

そうして名刺交換を授業で行ったわけだが、結果的には、町家合宿でやっているような名刺交換はできなかった。自分の名刺のデザインをイメージしてもらおうということと、名刺交換の方法のレクチャーを行い、あとは雑談という感じに終わってしまった。それでも10人弱の生徒たちはまじめに名刺交換のロールプレイに取り組んでくれたり、その後の雑談も、なごやかにお互いの話をいろいろとしてくれていた。名刺交換が役に立ったのかはわからないが、私は少なくとも「なんでもいいから授業をしてほしい」という先生方のニーズに対して、なんとか授業を埋められたことにホッとしたり、生徒たちが和気あいあいと話をする姿は、名刺交換が、生徒たち同士のコミュニケーションを促進させていたようにも思っている。

☆町家合宿の展開

こんなふうにな刺交換を町家合宿以外の、他の臨床現場で試してみることによって、心理臨床として名刺交換をすることの本質と言うか、効用、限界などが見えるような気がした。町家合宿の中で行っていることが、名刺交換に限らず、普段の臨床現場で生かされることが多いと改めて感じている。